

平成30年度 自己評価表

鳥取県立米子西高等学校

本校の学校方針	質の高い授業と親身な指導を通して、進路実現に必要な学力をつけるとともに、地域社会の多様なニーズに応え、郷土に貢献する「知、徳、体、志」のバランスのとれた人材を育成する。
指導重点目標	①自己実現を可能にする学力の向上 ②基本的な生活習慣と社会的規範意識の確立 ③安心且つ切磋琢磨できる人間関係の構築 ④保護者・地域と連携した活気ある学校づくり

重点目標	年 度 当 初				
	評価項目	評価の具体的項目	現 状	目 標 (年度末の目指す姿)	目 標 達 成 の た め の 方 策
①自己実現を可能にする学力の向上	高い志の育成	○目的意識と学ぶ意欲の向上	○進路目標が明確でなく、学習に対する意欲に欠けている生徒がいる ○「みらいチャレンジ活動」の導入とその成果発表会の開催により、主体的に学ぶ姿勢の育成とチャレンジする姿勢に改善が見られるようになってきたが、まだ不十分である	○「みらいチャレンジ活動」を中心に学問に対する興味や意欲を高め、主体的に学ぶ姿勢が身につく ○体験的な活動を重視し、目標達成に向けてチャレンジする態度・能力が育つ	・「みらいチャレンジ活動」を充実させ、地域への公開を継続する ・1年生・3年生の総合的な学習の時間の改善に向けて学年主任との連携を図る ・1年生での準備段階を充実させる。特に、1年生でコミュニケーショントレーニングを検証し、その充実を図る ・「みらいチャレンジ活動」と連携し、書籍による情報の重要性を認識させる ・1・2年生でビブリオバトルを実施し、コミュニケーション能力を育成をする
		○自ら課題を見つけその解決に向けて積極的に行動する態度の育成	○全教科・全教員でアクティブ・ラーニングに取り組むことはできたが、内容的には改善の余地がある ○授業での教師に対する評価、生徒の達成感が目標値に届いていない	○アンケートにおける生徒の達成感に関する肯定的な回答が70%以上、教師の指導力に関する肯定的な回答が80%以上になる ○全教員でアクティブラーニングに取り組み、その技法の改善を図る	・全教科、全教員でアクティブ・ラーニングに取り組み、その内容のブラッシュアップを目指す ・公開授業の教員相互の見学を通して、教科指導の中にアクティブ・ラーニングを定着させる ・iPadを中心としたICTの活用をさらに広げる
質の高い授業の実践	質の高い授業の実践	○アクティブ・ラーニングの実践により教員の授業力の向上を図り、生徒が主体的に参加する授業の創造	○全教科・全教員でアクティブ・ラーニングに取り組むことはできたが、内容的には改善の余地がある ○授業での教師に対する評価、生徒の達成感が目標値に届いていない	○アンケートにおける生徒の達成感に関する肯定的な回答が70%以上、教師の指導力に関する肯定的な回答が80%以上になる ○全教員でアクティブラーニングに取り組み、その技法の改善を図る	・全教科、全教員でアクティブ・ラーニングに取り組み、その内容のブラッシュアップを目指す ・公開授業の教員相互の見学を通して、教科指導の中にアクティブ・ラーニングを定着させる ・iPadを中心としたICTの活用をさらに広げる
		○習熟度別クラス編成、習熟度別授業のより効果的な展開	○家庭での学習時間が十分でない。また効果的な学習方法がわからない生徒もいる ○長期休業中の学習会の参加者は増加傾向にあり、参加した生徒にも好評である	○生徒の学力の分析を行い、分かる授業を展開している ○先進校視察を参考にして効果的な学力向上策を立てる	・先進校視察で得た情報を参考にして、本校教育の新たな方向性を決定する ・新たに1年生の国語に習熟度授業を導入し、より生徒の習熟の度合いに合った授業・考査・評価を工夫する
学習習慣の確立	学習習慣の確立	○高校での学習方法の理解と必要とされる家庭学習時間の確保	○家庭での学習時間が十分でない。また効果的な学習方法がわからない生徒もいる ○長期休業中の学習会の参加者は増加傾向にあり、参加した生徒にも好評である	○家庭学習時間調査で次の目標を達成する 平日： 1・2年生2時間以上、3年生3時間以上 休日： 1・2年生4時間以上、3年生5時間以上 ○オリエンテーションを通しての学習習慣の確立と学習方法を理解する	・課題の内容や量を精査しながら学力および学習意欲の一層の向上につながるよう取り組ませる ・進路講演会や個人面談等を通じて、日々の学習の大切さを生徒に理解させ、継続的に指導を行う ・生徒の能動的な学習につながるよう初期指導の充実および日常の継続的な指導を行う
		○休日や長期休業における学習の充実	○国公立大学の現役合格者数および模試の偏差値50以上の生徒数は目標値に届かなかった ○入学時点での学力差が広がり、進路意識の多様化が進む傾向にある	○キャリア教育を通して自立的な進路設計とその実現ができる生徒が増加する ○進路指導部を中心とした進路指導組織の確立する	・夏期学習会では事前に生徒に計画をきちんと立てさせ、より明確な意識をもって学習会に当たれるようにし、その後の学習にも繋がるように指導していく ・部活動との両立の一助になるよう各部活動との連携を図る
国公立大学・難関私立大学に合格できる力をつけた生徒の増加	国公立大学・難関私立大学に合格できる力をつけた生徒の増加	○主体的に進路を選択できる能力の育成と戦略的な進路指導組織の確立	○国公立大学の現役合格者数および模試の偏差値50以上の生徒数は目標値に届かなかった ○入学時点での学力差が広がり、進路意識の多様化が進む傾向にある	○キャリア教育を通して自立的な進路設計とその実現ができる生徒が増加する ○進路指導部を中心とした進路指導組織の確立する	・3年生の進路講演会は予備校から講師を招いて実施する内容を継続する ・10月と12月の進路調整会では、個人懇談や三者懇談で志望校決定の具体的な資料が提供できるようにする ・引き続き先進校視察、教員による大学訪問を実施し、進路指導に有効な情報の収集・蓄積を図り、生徒への指導に活かす
		○模試結果の利用とゼンター試験を意識した指導	○1月進研模試で偏差値50以上の生徒数が1年生で160人以上、2年生で140以上になる ○現役合格者が国公立大学で75人以上、難関私立大学で25人以上となる	○1・2年生の予備登録・本登録の時期や3年生の総体後など、回数は少なくとも進路を考えるべき時期に「進路だより」を通じて必要な情報を発信し、意識を高めさせる ○模試等で数値目標を設定し、その実現に向けて委員会検討を行う ○生徒に模試後の復習について具体的な方法を提示する ○模試分析を活用し、授業内容の改善と課題の工夫に繋げる	・1・2年生の予備登録・本登録の時期や3年生の総体後など、回数は少なくとも進路を考えるべき時期に「進路だより」を通じて必要な情報を発信し、意識を高めさせる ・模試等で数値目標を設定し、その実現に向けて委員会検討を行う ・生徒に模試後の復習について具体的な方法を提示する ・模試分析を活用し、授業内容の改善と課題の工夫に繋げる

評価基準 A：十分達成（100%） B：概ね達成（80%程度） C：変化の兆し（60%程度） D：まだ不十分（40%程度） E：目標・方策の見直し（30%以下）

重点目標	年 度 当 初				
	評価項目	評価の具体的項目	現状	目標（年度末の目指す姿） 目標達成のための方策	
②基本的な生活習慣と社会的規範意識の確立	基本的な生活習慣の確立	○健全な心身の育成	○問題行動は若干あったが、生徒全体としては概ね落ち着いた学校生活を送っている	○年間の問題行動発生件数が0になる	<ul style="list-style-type: none"> ・学年集会、終業式等で強く注意喚起する ・教室掲示用の「生徒部からの注意」を学期ごとに作成し、問題行動の発生防止に努める ・引き続き毎朝の昇降口指導を行い、遅刻者ができる限り減るよう努める ・精神的な問題を抱えている生徒については、生徒支援部との連携を行う
		○学力向上につながる生活リズムの確立	○昨年度は一昨年度に比べ遅刻する生徒が若干増加した	○年間遅刻者数が前年比10%減となる	
③安心且つ切磋琢磨できる人間関係の構築	健全な高校生活の充実	○社会の一員としての自覚の喚起	○自転車の運転マナーはやや改善したが、苦情の通報も少なくなっている ○TEASの活動については、ゴミの排出量、電力使用量、水道使用量とも現在のところ今年度の取り組み目標をほぼ達成できている	○地域からの信頼が向上する ○環境を意識した生活を送る	<ul style="list-style-type: none"> ・自転車通学時の事故も発生しており、自転車通学者への指導を強化する ・街頭指導の回数を増やすとともに、安全運転教室等の開催も検討する ・TEASに関しては、今年度の目標を達成する努力を継続していくとともに、生徒の環境意識を高める取り組みをしていく
		○部活と学習の両立ができる生徒の育成	○週1日の部活動休養日および定期考査前の部活禁止期間も徹底できている ○生徒会活動全般において、生徒会執行部が主体的に活動している	○週1日の部活動休養日および定期考査前の部活禁止期間も徹底と部活動と学習の切り替えがきちんとできる	
望ましい人間関係の構築	○部活動・生徒会活動の活性化	○自己の個性の理解と他者の個性の尊重 ○自尊感情の育成	○コミュニケーションが苦手な生徒や不適応の生徒の増加傾向にある ○SNS等でトラブルがおこることがある ○ボランティア活動への参加者が減少した	○自分を含め一人ひとりが大切な存在と認識できる ○良好な人間関係およびコミュニケーションができる	<ul style="list-style-type: none"> ・週1日の部活動休養日および定期考査前の部活禁止期間を設ける ・引き続き定期考査前の部室の鍵の受け渡しについては、活動申請を確認したうえで行うようにする ・生徒会執行部の生徒たちが、自分たちの仕事や年間の生徒会行事をスムーズに進行している現在の状況を維持する ・短時間でも成果が上がるような効率的な部活動指導を探る ・学期毎の職員会議において生徒の状況報告を行い、職員間の情報共有をさらに深める ・情報リテラシーに関する講演会は、今後も入学予定者とその保護者に対しても継続する ・教科「情報」だけでなく、iPadを用いた授業においても情報リテラシーについて積極的に取り上げる ・生徒が希望するボランティア活動が行えるように調整を行う ・部活動等の少人数での地域貢献活動の方法を探る
		○社会貢献活動への積極的な参加 ○主権者意識の育成	○各種ボランティアへの参加者が一層増加する ○部活動等の単位で地域貢献活動へ取り組む		
④保護者・地域と連携した活力ある学校づくり	学校教育活動の積極的な公開	○PTA活動の一層の充実 ○学校と保護者の連帯の強化	○PTA大学訪問研修や交通安全街頭指導にも保護者の積極的な参加がある ○ホームページを利用したの情報発信方法がタイムリーにできている	○PTA活動への参加者が増加する ○タイムリーにホームページの更新を行う	<ul style="list-style-type: none"> ・ホームページではタイムリーな情報発信を行う ・より多くの部活動が積極的にホームページで活動状況を発信する ・教育活動の発信についても、担当者が校務委員会で確認する ・保護者への案内文書やPTA広報紙での発信に加え、ホームページの更なる活用や地域への発信も行う ・例年発行のPTA人権広報誌により、生徒・保護者への内容の周知とともに人権意識の啓発を図る
		○公開授業や人権公開LHRの充実	○保護者、関係機関、地域からの参加者の増加する		
地域や関係機関との連携の強化	○中高連携事業の一層の充実 ○文化部総合芸術祭「翠燦く」の一層の充実	○中高連携事業の強化と生徒の変容	○芸術科を中心とした中高連携事業および文化部総合芸術祭「翠燦く」は取り組みとして定着している ○高大連携により「みらいチャレンジ活動」の充実を図ることができた	○学校全体で中高連携事業および文化部総合芸術祭「翠燦く」に取り組む	<ul style="list-style-type: none"> ・中高連携事業は本校生徒がより主体的に中学生に働きかけるように意識の醸成を図る ・「翠燦く」は、再スタートという気持ちで新たなものへの挑戦を模索する ・大学訪問での本校の卒業生との懇談は継続するが、研究発表会への参加など大学での学問・研究へ触れる機会を探る ・「みらいチャレンジ活動」は、今年度もアドバイザー（大学教授）を迎え専門家から見た活動への評価を参考にする
		○高大連携の強化と生徒の変容	○各大学訪問の参加者の予定人数が確保できる ○アドバイザーの指導により「みらいチャレンジ活動」が一層の充実する		

評価基準 A：十分達成（100%） B：概ね達成（80%程度） C：変化の兆し（60%程度） D：まだ不十分（40%程度） E：目標・方策の見直し（30%以下）